

## 論文番号 66

担当

滋賀医科大学 福祉保健医学講座

題名(原題/訳)

Light-to-moderate alcohol consumption and risk of stroke among US male physicians

米国男性医師での少量から中等度の飲酒が脳卒中の危険度に与える影響

執筆者

Berger K et al.

掲載誌(番号又は発行年月日)

N Engl J Med 341:1557-1564,1999

キーワード

軽度飲酒・中等度飲酒・脳卒中

要旨

(背景) 脳卒中は多くの国々で日常動作能力低下や死亡の主要な原因となっている。飲酒と冠動脈疾患との間に U 字型の関係があることが報告されて以来、脳卒中と飲酒との関係についても関心が高まってきている。欧米の研究では飲酒と脳梗塞の間に U 字型もしくは J 字型の関係が報告され、中度の飲酒は脳梗塞に対して予防的に働くとされている。

米国男性医師の健康状態に関する調査を用いて、前向きの研究デザインで、他の危険因子を調整した場合の飲酒と脳卒中の関係について検討した。

(方法) 米国男性医師の健康状態に関する調査は、元々は低容量アスピリン内服が循環器疾患の発症に与える影響およびβ-カロチンがガンの発症に与える影響を調べるための、無作為割り付け二重盲検法による介入研究であった。1982年に40~84歳の米国男性医師22,071名が対象であり、調査開始時には脳卒中・一過性脳虚血発作・心筋梗塞・活動性の肝疾患・胃潰瘍・十二指腸潰瘍の既往が無いことを確認している。今回の調査は1995年10月の追跡結果である。

ベースラインデータは全て郵送での質問調査である。飲酒習慣については「普段はどのくらいの頻度でアルコール飲料(ビール・ワイン・蒸留酒)を飲みますか」と質問し、1回当たりの飲酒量は一杯と解釈し、「週1杯未満」・「週2~4杯」・「週5~6杯」・「1日1杯以上」の5群に分類した。6ヶ月毎の郵送による追跡で、脳卒中の発症および脳卒中による死亡の有無を確認した。相対危険度はCoxの比例ハザードモデルにより、年齢・収縮期血圧・BMI・運動・糖尿病の既往・高血圧治療の有無・低容量アスピリンおよびβ-カロチンの割付の各項目について調整し、それらの影響を除外した。

(結果) 飲酒量が週1杯未満の群を基準とした場合、週1杯以上の群の相対危険度(および95%信頼区間)は、脳卒中全体で0.79(0.66-0.94)、脳梗塞で0.77(0.63-0.94)、出血性脳卒中で0.92(0.55-1.54)であった。これをグラフにすると、週1杯以上の飲酒で相対危険度が約20%低下するL字型の関係を示した。

(考察) これまでに飲酒と脳卒中のリスクについてはU字型やJ字型の関係があるとされてきたが、今回の調査対象の97%は飲酒量が1日1杯までの軽度から中等度飲酒に相当し、この狭い範囲での飲酒と脳卒中発症のリスクとの関係について詳細な検討が行えた。この解析では飲酒と脳卒中のリスクとの間にL字型の関係が見られたが、これは従来J字型の関係の左端の部分を見ているものと考えられる。飲酒による脳卒中の予防効果は週1杯の飲酒から見られ、その大きさは相対危険度が20%減少する程度であり、飲酒量が1日1杯までの範囲では、摂取量に関わらず同様の効果が得られた。